

わが国籍は天にあり

[聖書] マタイによる福音書 20章 1～16節

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにすることは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

[1] 本日は、「永眠者記念礼拝」と「墓前礼拝」

今日は、既にこの地上の歩みを終えて、主の許に眠っておられる方々を覚える「永眠者記念礼拝」を捧げています。私たちの教会は、毎年この時期に行い、午後には、教会の墓地の前でも「墓前礼拝」を捧げることになっています。

—「わが国籍は天にあり」。今日のお話の題をそう致しました。フィリピの信徒への手紙 3:20 の言葉からです。新共同訳では少し訳が違って、「わたしたちの本国は天にあります」となっていますが、とても心に響く言葉だと思います。文語の訳は特にいいですね。「我らの国籍は天に在り」。この言葉はとても響きが良いので、サラッと聞いてしまうことがあるかも知れませんが、改めて味わうと、こ

れは、凄い言葉ではないでしょうか。「私はこの地上ではなく、天を本籍（本国）にしているんだ」と言っている訳ですよ。主イエスと出会った者、主イエスに結ばれた者は、勿論この地上を生きるのですけれども、この地上だけが自分の国籍やホームではない。クリスチャンのまなざしは、天、上を向いているのです。

[2] 「天」が頭上にいつも広がっている

今日はいつもの「聖書教育」誌の箇所ではなく、ご一緒に主イエス様の有名な譬え話からご一緒にそのことを考えてみたいと導かれました。イエス様はこれを「**天の国とはこのような所だ**」と語られたのです。

この譬え話を読んで、或いは耳にして、私たちは、どうもしっくりしない気持ちが残ってしまうということがあるのではないのでしょうか。「何か腑に落ちない、おかしい」と正直、思ってしまうと思います。

或る主人が、自分のぶどう園で働く人を集めました。早朝から働いてくれた人、また9時から働いた人、昼ごろから働いた人、午後3時からの人、そして、もう夕暮れ近く5時から働いた人もいた訳です。そして、労働が終わり、賃金をそれぞれに支払ってくれた。そうしたら皆同じ金額だったと言います。それで怒り出す人がいました。夜明けから働いた人です。「1時間しか働かなかった者も、暑さの中、一日中働いた私も同じなのか！」ということです。「ズルい」という感情が沸き起こったのです。公平に1デナリオン貰ったのに、「不公平感」が残ってしまうのです。俺はもっと貰えるべきだと**昂ってしまう**。俺の方が「**努力**」が大きいのにあいつはズルいと**嫉妬**したりする。…これは逆のことも言えるのですね。

私たちは、オギャ〜！ と生まれた時はいいのですけれども、いつ頃からなのでしょうか、人間は、いわゆる「生産性」とか「大人になるということは、活躍出来る人間になること」だという価値観を植え付けられて生きることになってしまい、誰かと自分を比較しては「何も出来ない私はダメな人だ」「クズだ」「自分には才能がない」と思ってしまうこともあるのではないのでしょうか？ でも聖書は言っていると思うのです。「それはあなた方、**立っている所が違うよ**」と。

この譬え話の労働者も、他の人の賃金を見るから満足出来ないのです。そもそも、この主人からは「**1デナリオン**」という**約束**を受けて、それを貰っているのですから主人は間違っていないですよ。けれど、私たちは周りを見る。「自分があいつより劣るなんて受け入れがたい」とか「なぜ、私がこんな貧乏くじを引かなければいけないの？」とか思ってしまうのですね。

先ほどのフィリピの信徒への手紙の言葉の直前の言葉にこうあります。3:19「**彼らは(自分の)腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていま**

せん」と。ドキンとしますね。そしてパウロはその後で、3:20、「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待っています」と語っているのです。――

目線を上げよ！地上の価値にではなく、上を仰げ。あなたの本国は、今もキリストがそこにおられる天にあるのだから、と聖書は私たちに語っています。

人生の大事な歩み方について私たちが普通に抱いている考えは、例えば「結婚をして家庭を持つこと」とか「老後に困らないだけの貯えをすること」とか、(私も大事ではないとは言いませんが) 思う人も多いと思いますが、その見ている目がこの地上のことだけだったら、「天」が私たちの頭上にいつも広がっていることを忘れてしまっているのではないのでしょうか？―その「天」とは、主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待っている、そういう「天」です。

今日の週報に永眠者の方々の名が載っています。また、午後に行く教会墓地の墓石にも永眠者の名が刻まれています。この信仰の先輩たちは、祈りながらこの地上の生を全うした方々です。生涯色々なことがあったと思います。独りでは解決出来ない悩みにぶち当たったこと、或いは胸が潰れそうな悲しい出来事に出会うこともあったと思います。また、人知れず自分の罪深さに悶えるようなこともあったのではないのでしょうか。でも、その中で、人生には「地」だけでなく「天」があることを信じて、祈っていたと思うのです。ご家族がいらっしゃいますか？ご家族ならば、あなたのために毎日、或いは事あるごとに祈って過ごしていたことは間違いないことだと思います。この地上にあって、「天」の語りかけを聞きながら生きた人、それが、私たちの信仰の先輩たちです。

[3] 「同じように支払ってやりたい」

さて、このたとえ話に戻りますと、最初の方でも申しましたように、私たちが皆等しい賃金だというのは「ズルい」と思ってしまうのです。早朝から一生懸命働いている者に自分を重ねるからですね。けれども、この「最後の者」こそが、私たちだと思います。神様に、夜が迫って来る前に、まあ、ギリギリ見い出された者が、あなたであり、私なのではないのでしょうか。私たちはこの主人に、見つけて頂いた存在なのです。闇に包まれる直前、この夕刻5時から招かれた者たちです。

イエス様は仰いましたよね。「この最後の者(つまり私たち)にも、同じように支払ってやりたいのだ」と。この「支払う」とは、「代価を払う」、「命を捧げる」ということと同じような意味です。この「最後の者」を救うため、神様の救いから取り残される者が一人もいないように、イエス様は「天」から来られたのです。誰かとの比較

ではないのです。「どんなあなたであってもあなたを愛している」、その神様の愛を、あの十字架という形でハッキリと示すためにイエス様はやって来られたのです。

他の誰でもなく、イエス様ご自身がこの譬え話をされました。私たちは時々思います。イエス様は全ての人を救って下さると言うけれども、イエス様が来られたのは昔と言っても二千年前のことです。ではそれ以前の人たちはどうなの？と。それが旧約聖書の**預言者たちによる招き**なのではないでしょうか？ 神様はイエス・キリストを送られる随分前から人間を招いていて下さっていたのです。「**立ち返りなさい**」という招きです。けれども、イエス様の招きというのは、ただ「立ち帰れ」という招きではなく、「**わたしはあなたを贖った。あなたはわたしのものだ**」という、**神様の一方的な赦しの招き**です。私は、その、神様のやむにやまれぬ思いこそが「夕方5時」の招きなのではないか、と思えて仕方がありません。そこでは、人間の良き業、人間の働き、というものが前提とならず、それこそ「**天**」から「**あなたは赦された！**」という、神様ご自身が印鑑を押されたような出来事なのだと思うのです。

この譬え話は、そういう意味では、**神様の救済史がここで完成した**、ということも告げているのだと思います。

ヨハネの黙示録を描いた使徒ヨハネは、島流し(流刑地)にあったその場所で、イエス・キリストの勝利の幻に触れて、言いました。

「**書き記せ。『今よりのち、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と**」。(黙示録 14:13)

先に眠りについた者たちは、その生涯そのものが、**神様によって捕らえられている**ことを信じて生きた人々です。天の風が運んでくるその魂の安らぎが作る表情、また、祈る姿。讚美を歌う歌声…。そして、それは私たちも同じです。**私たちの内に主イエスがいて下さることにより**、私たちの存在を通して、「**主に結ばれて死ぬ人は幸いである**」と語って下さるのです。誰もが1デナリオンを頂いています。例外はありません。それはあの十字架で裂かれた**主の体と血汐、主イエスの命**です。お祈り致します。

神様、今年もこのようにして永眠者記念礼拝を共に捧げることが出来、感謝いたします！私たちの土台はこの地上でなく、主イエスがおられる天にあります。こんな弱く罪深い者をあなたは探し、赦し、あの十字架によってみ許に引き寄せて下さいました。この地上の歩みを許される限り、神様と隣り人を愛する愛に生きて行きたいと思えます。その中で、あなたが生きておられることを、信仰の先達たちと共に証しさせて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。